

フォルクスワーゲン 18番工場 谷 克二



フォルクスワーゲン 18番工場 谷 克二

フォルクスワーゲン18番工場

一九八〇年二月五日 第二刷

定価九百八十円

谷克二（たに かつじ）

一九四一年宮崎県生まれ。早稲田大学卒業後、渡独、フォルクスワーゲン社に就職。のちロンドン大学入学、一九六九年帰国。「追うもの」により第一回野性時代新人文学賞受賞。『狙撃者』により第五回角川小説賞受賞。著書に『サバンナ』『越境線』『地中海の真珠』など。

著者 谷 克二

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話（〇三）二六五一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 和田製本

方々、落丁、乱丁の場合は

お取替致します

目次

フォルクスワーゲン18番工場

5

ワーゲン18番工場の冬

83

ベルリンの女

159

へあとがき

226

装帧
坂田政则

フ
ォ
ル
ク
ス
ワ
ー
ゲ
ン
18
番
工
場

フォルクスワーゲン18番工場

赤レンガの巨大な建物が、サーチライトの強い照射を受けていた。夜明け前の陰鬱な暗さに抗うように、鮮明な輪郭を漆黒の背景から切り取っている。へ18という白い数字が、屋根近くの壁面にくっきりと浮き出していた。そこが、18番工場だった。

アーク燈で照らされた舗装道路を、労働者たちが凍てついた路面に靴音を響かせながら、工場へとむかっていた。

「お早う」
イェレン・モルゲン

挨拶を交わす低い声が、ときおり彼らの中から聞えた。短い言葉の量だけ、うっすらと白い息が流れ出るのが見えた。

アーク燈の柱列が、遠い闇の中で黄色い葱坊主のように並んでいた。その延長にも、同じ形の

建物がサーチライトを浴びていた。壁面には「17」という数字が見えていた。

アーク燈の行列は、整然とした間隔を保ちながら平行して遠ざかり、眼の届くかぎり続いていた。建物は肩と肩を接し、城壁のように連なっていた。

足早やに歩く労働者の流れに混って、私は18番工場にむかっていた。棘を含んだ寒気から身を守るため、外套の襟をたて、両手をポケットにつっこんでいた。ドイツの三月は、まだ冬の最中であつた。

右手の指先に、ときたま小さく折れたたんだ紙きれが触れた。それは、昨日受けとった採用通知書であつた。

——フォルクスワーゲン・ボルフスブルグ工場は、工場労務員として貴君と雇用契約を結ぶことを御通知申しあげます。三月四日、午前七時三十分18番工場工場長、クラウス・ヤーンまで届け出られたし。人事部——

通知書にはタイプでそう記されていた。

五日前、私はフォルクスワーゲン社の人事部にいた。やわらかい間接照明をうけたオフィスは、清潔そうに見えた。整った身なりの社員たちが執務していた。リズムカルなタイプの音が、重なりあって空間にはぜていた。

私の前には、担当者が坐っていた。中年をすぎ、顔の筋肉にゆるみができている。よく飲みよ

く食らい、仕事と家庭を大事にする平均的ドイツ人の典型、といった男だった。

彼は、私の就職願書と履歴書を左右の手に持っていた。それは、下宿の親父と夜っぴて作ったものだった。担当者の猿のような眼玉が、二つの書類の間を往復していた。

「だいたい分りました」担当者は顔をあげて言った。身体に似つかわしくないほど女性的な声だった。「貴方がドイツ語を専門に学んだことも分ったし、オフィスで働きたい意向があることも分りました。しかし……」

気をもたせるように、言葉を切った。私は先をうながす表情を作った。

担当者は、嗜虐的な笑いを眼のふちに浮かべていた。しばらく私を見ていたが、やがて愉快そうな口調で言った。

「言葉が駄目ですなあ。ドイツ語が……。普通の会話ならまあまあだが、オフィスでは使いものになりませんよ」

その言葉で、胸の中に残っていたわずかな希望の灯が吹き消された。

——確かにそうだ。あのときだって……。

私の脳裏を、ハンブルグの駅頭がかすめた。

ドイツに着いた朝だった。私はポルフスブルグという北ドイツの工場町まで、鉄道を利用して行くつもりだった。ハンブルグから四百キロの距離である。急行でも三時間はかかった。

私のドイツ語を、駅員はなかなか理解しなかった。かろうじて、目的地の名前を相手に伝える

ことが出来たが、今度は駅員の説明が解らなかった。機関銃のようにとびだしてくる言葉の中から、どうにか、プラットフォームの番号をひろいあげ、汽車に乗りこんだ。——しかし、その汽車は私の乗ろうとした急行ではなかった。行先は同じだったが鈍行で、しかも大廻りをして三倍ちかい距離を走った。

ハンブルクの方言はドイツ人にも判りにくいものだから、と下宿の親父はなぐさめてくれた。しかし、それまで多少とも持っていたドイツ語に対する自信は、木ッ端微塵に吹っ飛んでしまった。わずかに残った自負に鞭打って、フォルクスワーゲン社に就職願書をだしたのは、それから一カ月後のことであつた。

「なにか、解決方法はありませんか？」

取りすがるような気持ちで、私は訊ねた。手持ちの金も残り少なくなっていた。仕事を始めなければならなかった。

「そうですなあ」担当者は机に身体を擦り寄せた。揶揄するような口調で言った。

「どうですか。いっそ工場で働いてみては？ 見たところ、丈夫そうな身体をしているじゃないですか？」

18番工場は、広大な体育館のようであつた。内部は機械油の臭気と騒音に満ちていた。明るい照明の下で、機械の部品を積んだフォークリフトが走り廻っていた。運転をしているのは、ほと

んどが女だった。紺色の作業服を着て、ハンドルを操作していた。

鉄板が、銀色の帯のように裁断機に流れこんでいた。それは、一定の長さにカットされると、塔のようにそびえ立っているプレス加工の機械に押し込まれていった。重苦しい衝突音をたてて巨人の掌のようなコンプレッサが噛みあい、分離すると、そこには「かぶと虫」と呼ばれる独特の車体が生み出されていた。

貨車が、次々と工場内の引込線に到着していた。ブレーキの音が軋み、すぐに連結部がぶつかりあうけたたましい音が続いた。天井には、レールが張りめぐらしてあった。そこからぶらさがったクレーンが、一せいにうなりをあげて貨物の積載を開始した。電気溶接の青白い火花が沫のように飛び散っていた。

私は、そんな光景の中に所在なくたたずんでいた。たくましい身体の労働者たちは、あるものはせわしなく動き廻り、あるものは作業に熱中していた。東洋人である私に、関心を払うものはいなかった。

私から五メートルほど離れて、工場長が一人の男と話をしていて。男は工場長の話にうなずきながら、ときどき私を眺めた。北海の雲をおもわせる、暗い鉛色の眼をしていた。

輪郭のはっきりした、大きな顔だった。チュートン系特有の、まっすぐな頬をしている。

背丈は私と同じくらいだから、百八十センチはあった。しかし、胸幅とその上に組み合わされた腕の太さは、ゆうに私の二倍ちかくはあるように思えた。上腕の二頭筋がふくらみ、シャツの

袖がひき千切れそうに張っていた。無造作にかきあげた髪の毛は栗色だったが、その生えざわは灰色がかっていた。それが、彼の年齢を表わしていた。

男は私を見ながら、薄笑いを浮かべているように見えた。しかし、よく見るとそれは唇の端をまくりあげるようにして引攀っている古い傷跡のせいだ、ということが判った。

工場長が手まねきをして私を呼んだ。男を紹介した。

「ワルターだ」

ワルターは、鋭い眼付きで私を見た。挨拶もせず、組んだ腕もほどかなかった。

「こいつは日本人だ。今度、この工場で働くことになったやつだ」工場長は男に言った。

「ところで、お前の名前は何というんだ？」

「タニです」私は答えた。

「そいつは苗字か？ 名前か？」

「苗字です」

「じゃあ、名前は何て言うんだ？」

私は名前を言った。ドイツ人には覚えにくい発音だった。

「何だって？」工場長はよく聞きとれない、といった仕草で耳に手を添えた。私はもう一度名前を言った。

「そいつは覚えにくい」ワルターが言った。初めて聞いた声は、よく通るが底ごもりのする響き

があった。「日本人^{ヤバイナ}でいい。そう呼ぶ」

断定するような言い方に、私は不快感を持った。

「そうだ。それでいい」工場長がすかさず相槌を打った。どこかに、迎合するような調子を感じられた。

「C作業台^{ツエー・バンド}が、お前の働く場所だ。仕事の段取りは……」

工場長が、そこまで言ったときだった。突然、金属板の崩れおちるすさまじい響きが聞えた。鋭い叫び声があがった。

「事故だっ！」

工場長が、はねあがるようにして駆け出した。その姿は、うず高く積まれた自動車の部品の間に消えた。

ワルターは、腕を組んでつつ立ったままだった。首をひねって、その方角に眼をむけていた。見回すと、他の連中もわずかの間だけ作業の手を止めたが、すぐに自分の仕事に集中しはじめた。

工場長は、すぐに戻ってきた。顔が緊張して蒼味がかったいた。

「どうでした」ワルターが訊ねた。

「A作業台^{アー・バンド}だ」工場長が答えた。「積み重ねていたボディが崩れて、一人下敷きになった」「ひどいんですか、怪我は？」

「右脚がぱっきりやられている。骨もいかれてるし、筋だけで上下つながっているようなものだ」

少し間を置いて、ワルターが言った。

「ところで、こいつのことは？」

「まかせろ。俺は事故の連絡に行ってくる」

そう言うと、工場長は足早やに立ち去っていった。

「事故は多いのか？」私はのっけからぞんざいな口のきき方をした。どこか高圧的なワルターの態度に、反撥を感じていたからである。しかし、ワルターは、私のそんな物言いにはなんの反応も示さず、ごくあっさりと答えた。

「ときたまだ。だが、おれば並の怪我じゃ済まん。なにせ、相手は鉄の板だからな」

組んでいた腕をほどいた。暗い鉛色の眼が私を見た。底ごもりのする声が言った。

「ついてこい、新米。^{グリーン}道具を渡してやる」

ワルターは、先に立って歩きはじめた。私は彼に従って、工場の隅にある工具受渡所に向った。真新しい工具を受取っていると、救急車の不安なサイレンの音が遠くから聞えてきた。

「梱包が俺たちの仕事だ。一つの箱の中に、自動車六台つめこむんだ」^{ツェー・バンド} C作業台にむかって歩きながら、ワルターが言った。